オリカルクムの記憶

八　キリガミネ　探訪

峯村　明

オリカルクムの記憶 8

登場人物
キリガミネ 探訪
067.
068.
069.
070.
071.
072.
073.
074.
075.
あとがき
奥付

登場人物

竜門渕　めるの	湖畔の旧家、竜門渕家の後継者　１５歳
竜門渕　遠野	竜門渕家の現在の当主　めるのの曽祖母
河合　保ノ助	湖畔の温泉宿『かわいや』のせがれ　１４歳
かわいや	温泉宿『かわいや』の亭主
A.V.ラウレンス	ベルギー人の鉱物学者
おシゲ ／　源三	竜門渕家の使用人
星名　千助	アマチュアの鉱物学者
メンドルプ	化学者
Ｆ・ヴァリス	フィンランド人の医者

キリガミネ 探訪

067.

　化学者たちにはすることが山ほどあった。極低温に傷めつけられた世界を創り直さなければならなかった。気候を調整し、土壌を改良し、植物を蘇らせた。人間を含めた動物の病気の治療なども彼らの仕事のうちだった。それらの仕事は元素霊たちと重なる部分が多く、じっさい、元素霊たちが手を貸した。

後世、彼らは『金属を錬る者』あるいは。『黄金を作る者』という意味の名で呼ばれたが、彼ら自身、黄金作りなどそれほど重視していなかったし、単なる副業という認識しかなかった。
『なんだ黄金か。たかが黄金か』
全自然が解き明かされている者にとって、黄金がつくりだせることとは、悪魔が自分に従順であるのと同じくらい、少しも喜ばしいことではなかったのだ。

（※・あとがき参照）

……かように、彼らにとって黄金とはそれだけのものだったのだが、欲に目が眩んだ権力者は力づくで絞りとれるものはすべて絞りとろうとした。あげくの果てに、権力者は手に入れた領土からなにから、すべてを失った。

メンドルプ配下の化学者たちの多くは南方の安全地帯に逃れたが、一部はメンドルプのもとに集まった。そこはひじょうに寒かったがひじょうに興味深いものがあった。全知全能のごとき化学者たちにも未知のもの。神々の金属、オリカルクムが。

068.

寒冷な高地の湖のほとり、岬に工房が造られ、化学者たちはオリカルクムの円盤を観察した。円盤は湖から動く気配はなかった。
さまざまな思考錯誤が繰り返された。黄金づくりなど副業にすぎないという認識の化学者たちにとって、それは生まれ変わるような経験だった。オリカルクムの構築にはいくつかの条件が必要だったが、門外不出事項であり、厳重に隠された。オリカルクムが万能にして特殊な性質をもつ金属であり、黄金とは比較にならない価値があったためだ。ゆえに、使用目的はきわめて限定されていた。

長い年月ののち、大地震がこの地を襲い、工房は岬ごと崩壊し、湖周辺の地形がすっかり変わってしまったころには化学者たちの世代交代も進んでいた。その後の彼らの行方はわからない。

円盤がこの地へやって来たのは、はたして神々の意志だろうか考えるめるのにミツハは答えた。
(彼がそう望んだのです)、と。(両親と出会う場所として、彼がこの地を望んだのです)
(その時)とミツハは続ける。その時とはいつだろうとめるのは考える。
(その時、あなたの使命は終わりを迎えるのです。なんとなれば、それが竜門渕の最後の存在理由だったのですから

最後の、存在理由――？

(人間は絶滅すると思われたあの時から、竜門渕は水の精霊の力を使って人間を増やし、過酷な自然から守った。
けれどその役割もはるか昔に終わっています。人間は自らの意志で増え、広がった。そのあとは、人々の思い出が、竜門渕を祀り上げていた。それだけのことなのですよ――)

069.

永遠ともいえる竜門渕の歴史が終わる。幕を下ろすのは――私――

ミツハの声は自分の声だった。夢うつつにめるのはつぶやいた。それは――私――

はっ、と誰かが息をのむ気配。
誰か、そこにいるの――？
気配はめるののそばを離れた。足音が遠ざかっていく。ひとりのものだった足音が、やがて、いくつも重なって戻ってきた。

「――めるの！」
「めるのさま！！」

軽い吐息と共に、目を開く。周囲には優しい薄明かり。障子越しの朝の陽ざしだ。

「めるのや！！」
「……とおのさま？」
「なにが『とおのさま』、じゃ！　わしじゃわし！！　ばばじゃ！！」
「おばあさま……おシゲさんに……源三さん……」

あの嵐の夜。祈祷中に気を失ったのだ、と遠野は言った。
「それから間もなく嵐は収まった。
水門が開かれたが手遅れじゃった。湖は溢れ、低い土地は水に浸かってしもうた」
いつも通りに遠野は淡々としていたが、顔色はすぐれなかった。
水つ早湖の古地図を見ればわかるが、かつては現在よりも三倍も大きく、水深も深かった。しかし人が集まってきて人口が増えてくると食糧確保のため、浅いところは埋め立てられ、水田となっていった。水つ早湖に流入する川は周囲の山々を水源としていくつもあるが、流出は天竜川一本のみである。入ってくる水量は変わらず、湖の面積は狭くなる一方、古い時代から洪水は幾度となく繰り返されてきていた。どだい、人間が増え、物質化された世界が、神頼みでなんとかなるわけがなかったのだ。

「めるのさまが気を失って床につかれてから、十日もの間、遠野さまは寝ずの看病をされたんですよ」
　おシゲの言葉にめるのは、がばと起き上がった。
「十日！　十日も！？　そんなに私は眠ったままだったというの！？」

070.

　めるのと入れ替わりに、今度は遠野が床についた。その話を聞いて、住民たちは竜門渕の主の交替を噂しあったが、遠野は「簡単に交替なんぞするもんかい！」と、かえっていきり立ち、住民たちを震えあがらせた。
　しょうもない噂を広めた者たちは「つまらないことで龍神・竜門渕家の当主の怒りをあおった」として、町議会から厳重な注意を受けたのだった。

　しかし――水による被害を受けた人々にしてみれば、『水神の裔』などもはや形だけのもので、実質的な意味などないと思い知ることになったのである。それは竜門渕の終焉でもあった。

071.

　最近、保ノ助はえらく早い時刻に竜門渕家を訪れる。湖で漁をし、その足で、竜門渕家の体力を落としてしまった女衆に新鮮なシジミをとどけるのである。彼は巷でささやかれているめるのとの噂を知らないではなかった。

　ただ、彼にとってめるのという存在は神秘の旧家の一員なのである。この旧家と関わることによって、保ノ助は自分の生まれた土地の歴史やら鉱物やらについて目を開かされた思いで、生まれて初めて、学びたい、と思ったのである。星名千介との出会いもまた特別なものだった。彼の激しさを毛嫌いしていた保ノ助だったが、千介の学ぶこと、探究することへの執念を知ると、それは保ノ助の中で嫌悪ではなく、意外にも、引き継ぎたいという思いを立ち上がらせたのだった。

田舎の温泉宿のせがれの生活は家業が最優先、経済的にもそれ以外の道はあり得なかった。汽車で女学校へ通っている竜門渕のお嬢様はさながら雲上人であって、自分の中に芽生えた学問への興味やら巷の下世話な噂やらになんとなくもんもんとした思いを抱えながら、保ノ助は下僕のような気持ちで竜門渕家にシジミを届けていた。親父からは竜門渕のお屋敷に長居しちゃあなんねえと事あるごとにいいふくめられていたし、登校の時間も迫っていれば、用事が済めばさっさと帰ってしまうのだった。

今日は日曜日、竜門渕の勝手口にはおシゲがいて、源三が出かけるのを見送っていた。そこへ奥からめるのが出てきた。保ノ助とは久方ぶりの再会だった。

保ノ助はすっかり回復しためるのを見て、「いやあよかったよかった」と手放しで喜び、めるのも嬉しく思った。目が覚めてからは長い昏睡の間に経験したことはきれいさっぱり忘れてしまっていた。保ノ助となにやら意味深いあれこれを語りあったような気がするのだが、いつも通りの能天気な彼の顔をみると、ただの夢だったのねとしか思えなかった。

保ノ助が源三に「今日もご苦労様ですねい」と挨拶をしている。源三は苦笑のような表情を浮かべている。めるのが「こんなに朝早く、どこへ？」とオシゲに尋ねると、「ラウレンス先生のお供ですよ」ということだった。「先生、このところキリガミネへ通ってるんですよ」

072.

ラウレンス氏にキリガミネ探訪を勧めたのは星名千介だった。この広大な高原は南に開けてめっぽう日当たりがよく、東、北、西を山に囲まれ、いずれも国内有数の黒曜石原産地を擁するというのだ。

「東の八ヶ岳はちと距離があるが、北部と北西部の原産地はキリガミネの裏山みたいな場所だ。ホシクソ峠、オメグラ、ワダ峠、ホシガトウ、ホシガダイ、ヒガシマタ（※2）……」

千助の口からすらすらと出てくる地名を慌てて書き留めるラウレンス氏である。聞けば、キリガミネ高原の西の稜線の中に中山道があるのだという。そういうことならこれらの原産地にもすぐに手が届きそうではないか！　とはいうものの、街道から手の届くところに黒曜石の露頭があるわけではない、街道を東側のキリガミネへ降ってみようとしたが、すぐに諦めた。

千助のように地元に精通した人間と違って、コンパスくらいしか持っていない外来者には右も左もわからない、深い山の中でしかない。こういう土地の探訪には水先案内人が必要なのだ。水つ早町へ帰って「かわいや」のご主人か竜門渕のご当主に誰か紹介してもらいましょう、そう心に決めて帰路を急いだ。

早々に帰って正解だった。この日の晩遅く、水つ早町は未曾有の大雨に襲われたのである。

大雨と洪水の被害の跡片付けが収まりを見せはじめ、「かわいや」の日々の暮らしも元に戻ったころ、ラウレンス氏はようやく念願のキリガミネ行きを決行した。高原はもう夏の盛り真っ只中だった。

キリガミネの代名詞のようなレンゲツツジもニッコウキスゲも華々しい盛りをとうに過ぎ、源三を残念がらせたが、ウメバチソウやキンバイソウといった初秋の可憐な花々にラウレンス氏は心をときめかせた。千介氏に勧められた石のことはそっちのけで植物を手当たり次第にスケッチしてまわった。

そこはかとない趣きや繊細なニュアンスは彼の大好物だった。そんな彼の目を釘付けにしたのが日陰でひっそりと咲く季節外れの小さな花だった。
「ややや！！」源三がすっとんきょうな声をあげた。「こりゃあ、タチツボスミレじゃねえだか！！
あ、そこにも！　あそこにも！　なんとスミレの群生地がこんな目につかねえとこに！！」

源三はスミレという名を連発した。キリガミネのどこかに群生地があるという噂は聞いたことがあるが、なにしろ花の季節が短く、丈も低く、あっという間にほかの華やかな花や背の高い葉っぱに隠されてしまうらしく、幻の花のように云われていたもので、つい興奮してしまったのだった。

後日、スケッチブックを見せられてめるのは思わず後ずさった。スミレの花で埋まっていたものだから。
ラウレンス氏はもうすっかり相好を崩していた。「ははは、ね、可愛いでしょう！？　かたちといい名前といい、すっかり気に入りました！　いつか娘を持ったら、『スミレ』という名にするのです！！」

遠野は「そりゃ楽しみなことじゃ」、と乾いた態度で受け流し、保ノ助は容赦なく大笑いした。「せんせー。先に嫁さん見つけなくっちゃね！」

073.

″キリガミネの草原が広がったのは、平安時代以降と見られる。
特に江戸時代には周辺集落の農耕用牛馬の飼料や田畑の肥料として草の需要が高まり、全山にわたる本格的な採草が行われるようになった。これに伴いキリガミネの草原が完成されたと考えられている。
ただし、キリガミネは標高千六百メートルを超える高冷地で、やせた火山灰土壌であり、風が強く吹きつけるなど、一部は自然草原であったとも考えられる。
近世以降、キリガミネの草原は、周辺集落の人々の採草と草の生産能力を維持するために野焼きにより維持され、数百年の間に独自の植生が形成された ″

そして湿原は湖沼から始まる。

堆積物の溜まった湖沼にカヤツリグサなどの植物が侵入し、湖沼はやがて湿原に変わる。年間を通して冷涼な気候のため、植物は枯れても分解せず泥炭となって堆積していく。物は上へ上へと積み重なり、湿原全体が水面よりも高くなり皿を伏せたように盛り上がる。これが高層湿原である。

キリガミネには何ヶ所かそんな場所があるが、泥炭層の最も発達しているのは西の一画、八島ヶ原湿原である。その厚さはおよそ八メートル。

「1年で1mm堆積するとして、ざっと見積もって、一万年かかる勘定です。……気が遠くなりますね」
八島ヶ原湿原の北の稜線から湿原を見渡し、ラウレンス氏はつぶやく。視線を少し上げるとどこまでも緑の草原が連なっているのが見える。ずっと南へ目をやれば、ところどころで何かがきらめいている。川や水場が陽光を弾いているのだ。

ラウレンス氏の隣には連れがいた。小柄な源三ではない。背の高い人物。つばの広い帽子をかぶり、双眼鏡を覗いている。やがて双眼鏡を下ろすと、現れたのは真っ青な目。冬のキリガミネの空のように冴えた青い色の目。

「きみがちっとも帰ってこない訳がわかったよ。アルベルト」若々しい声で彼は言った。「美しい！とても、美しい！」

ラウレンス氏は満足げにうなずき、南の方を指さした。「この方角にゲーロッパラ、ジャコッパラ……」

連れの青年は眉をしかめた。「ゲーロッパラ？　ジャコッパラ？　なんだか奇妙な響きだ」

「話に聞いているだけでね、まだ行ったことがないのです。さて、フレディ、出発するとしましょうか。カエルや蛇がいるかもしれないから、気をつけて」

青年はますます眉をしかめた。カエルは可愛いが蛇は苦手だ。

074.

緩い傾斜を下っていくとみるみる植生が変わってくる。草の丈は高くなり、灌木が増え、まばらながら森が出現する。
ラウレンス氏は一度この近くまで来たことがあった。スミレの群生地を見つけたのはこの辺だった。その時はスケッチに夢中になってしまい、それ以上先に進めなかった。白いタチツボスミレの花はさすがに終わっていることだろう。もう初秋の草花がとって代わっている。

水が流れている。その様子を見るのに双眼鏡はいらない。荒々しいまでの水音が流れの存在を示している。岩場、立木の根元、低地を選び、ところかまわず、激しく水が流れている。梢の隙間から木漏れ日が差し込み、きらきらきらきらと散乱している。

イモリ沢というのが森の中を南へ流れているのだと、以前案内してくれた源三が教えてくれたのだった。北東にあるクルマヤマの湧き水が集まった流れで、湧き水の量によって枯れかかったり、溢れかえったりして、流路は一定しないのだという。イモリ沢という名は、名前通りイモリやサンショウウオが棲みついているからで、時にはイワナの姿もあるらしい。

葉擦れの音、水音、ときおり野鳥の鳴く声。原初の沢――そんな言葉をフレディ・ヴァリスは思い浮かべていた。

ラウレンス氏は沢の中から何か拾い上げ、陽の光にかざしている。親指と人差し指の間のそれは、薄茶色に透き通り、木の葉のように整った形をしていた。人の手で加工された黒曜石。
「――この沢を遡ったことがある――」
そのつぶやきに、フレディ・ヴァリスは、え？　と友を振り返った。ここへ来るのは初めてだと言っていなかったっけ？

「ふもとは花が咲き乱れていました。白、桃色、黄色……春の盛りの、さまざまな花が競うように咲き、いい匂いがして、ミツバチや蝶がとびかっていた。暖かな陽射しを背に、私はここへ来て、沢を遡った。この沢だ。底で無数の黒曜石がきらめいていた。沢沿いか上流に加工場があるのだろうと思いましたが、私は別のことに気をとられた。丘陵の斜面一面に、植物が植わっていたのです。これは何という植物かと、私は尋ねた――」

「うん……？」急に何を言いだすんだろうと、フレディ・ヴァリスは怪訝に思いながら眉をひそめた。

アルベルト・ラウレンス氏の表情は夢見るように嬉しそうでもあり、悪夢を思い出すように辛そうにも見えた。

「特別な植物だったのです。栽培に適さないが育てなければならない。そのために、最適地としてここが選ばれ、品種改良が繰り返された。畑になるまでにたいへんな苦労があった。開墾し、耕し、肥料を入れ……そんな人々の重労働を、巨人が手助けした――」

憑かれたように、しかし淀みなく、ラウレンス氏はつぶやいていた。空にかざした黒曜石を通して、彼の目には何かが見えているかのようだった。

「アルベルト？」

　やおらラウレンス氏は　つまんでいた石を放りなげ、膝を折って流れに手をつっこみ、両手で水をすくって自分の顔面に浴びせた。飛沫は飛び上がるほど冷たかった。

「これは私の記憶なのか！？　いやそんなはずはない！　ではどこかほかの場所と思い違いをしている？　こんな特異な場所がふたつとあるものか！　私は――どうしてしまったんだ！？」

　ラウレンス氏はすっかり混乱して自問自答を繰り返していた。
　その様子から、彼は覚えのない記憶を目の当たりにしているのではないかと、フレディ・ヴァリスは医者の観点から考えた。

　ラウレンス氏は差し出されたリネンのハンカチを受け取り、その中に顔面を埋めた。肩に友人の手を感じる。

「夏の間連日キリガミネを歩いていたそうだね。疲れているのかもしれないよ。帰ろう。日のあるうちに、下山しよう」

075.

　キリガミネでは人が消えることがある、源三はそう言っていた。
「キリガミネに登って帰ってこなかった人間が、昔から大勢いる。キツネに化かされて道に迷ったんだろう、天狗にさらわれたんだろう、雷神さまの通り道だから、雷さまにつれていかれたんだろう、とかな。まるっきり姿を消してしまうのだ。神隠しというやつだ。だから――」

　キリガミネ探訪もいいが、かならず、日のあるうちに下山しなされ、と源三は忠告した。日暮れどきはことさら夕陽が美しいところだが、日が落ちてしまった黄昏時のキリガミネを歩くことは勧めない。源三は頑固に何度もそういうのだった。

そうとも知らず、フレディ・ヴァリスは失調気味の友と連れだって、その日暮れどきの丘を下った。少し湿った空気は植物と土の匂いがした。夕陽があたりを橙色に染め、木々のシルエットが木炭で描かれたようにくっきりと立っている。

アルベルトが、大のおとなが夢中になるのも無理はないと思う。
けれど、自分自身の心の奥底、記憶の深みから得体のしれない何かが、身震いするような郷愁の念と共に浮かび上がってくる、これはいったい何だろう？

ああ、と彼は呻いた。懐かしい、と思った。声をあげて泣きたいほど懐かしい。夕陽の中に陽炎のような揺らめきが生じ、遠くを指さしていた。

８・「キリガミネ 探訪」

9・「思い出の予感」へ続く

あとがき

　ここ何年も風邪ひいたことなかったのに。コロナにかかってしまった。なにしろ、喉が痛い！　おかゆしか食べられない（泣）　おかげでだいぶ痩せ、寝込んでいる間に創作の波がどこかへ消えてしまった。これからがんばって練り練りします。後書きから先に書いてたりして。
（11月15日げんざい）

てなことで二週間くらいがんばった。さーいよいよ大詰めか！　という段になって、なんということか！　データを呼び出しても出て来ない！　そういえば一年前にもこんなことがあったなーと嫌な予感と共にデータがすっかり消えてることをかくにん。ったく、なんでやねん！　ですよ、データ保存しなければプログラムは終了しないはずなのに！　呼び出したら消えてるって…ひどい…ひどいわ

まー過去のは電子書籍化するのにあちこちに分けておいてあるんで、それはいくらでも復元できるんだけど、困るのは今執筆中のやつ。こないだコロナにかかる前に（苦労して）書いてたのはもう一ケ月くらい前のだから、ほとんど覚えてない…もいっかい書き直し？
それともひとつ困るのは、資料ひっくり返しながらの覚書きまで消えてしまったこと。もいっかい資料ひっくり返し？

ぐちぐち書いてるうちになんとなく思い出してきた。それにしても十話以上あったのを書き直すのはさすがにしんどい（泣）

泣き言はこれくらいにして。

書き直してるうちに最終章のはずが最終章で収まらなくなってきましたんで。続きます。

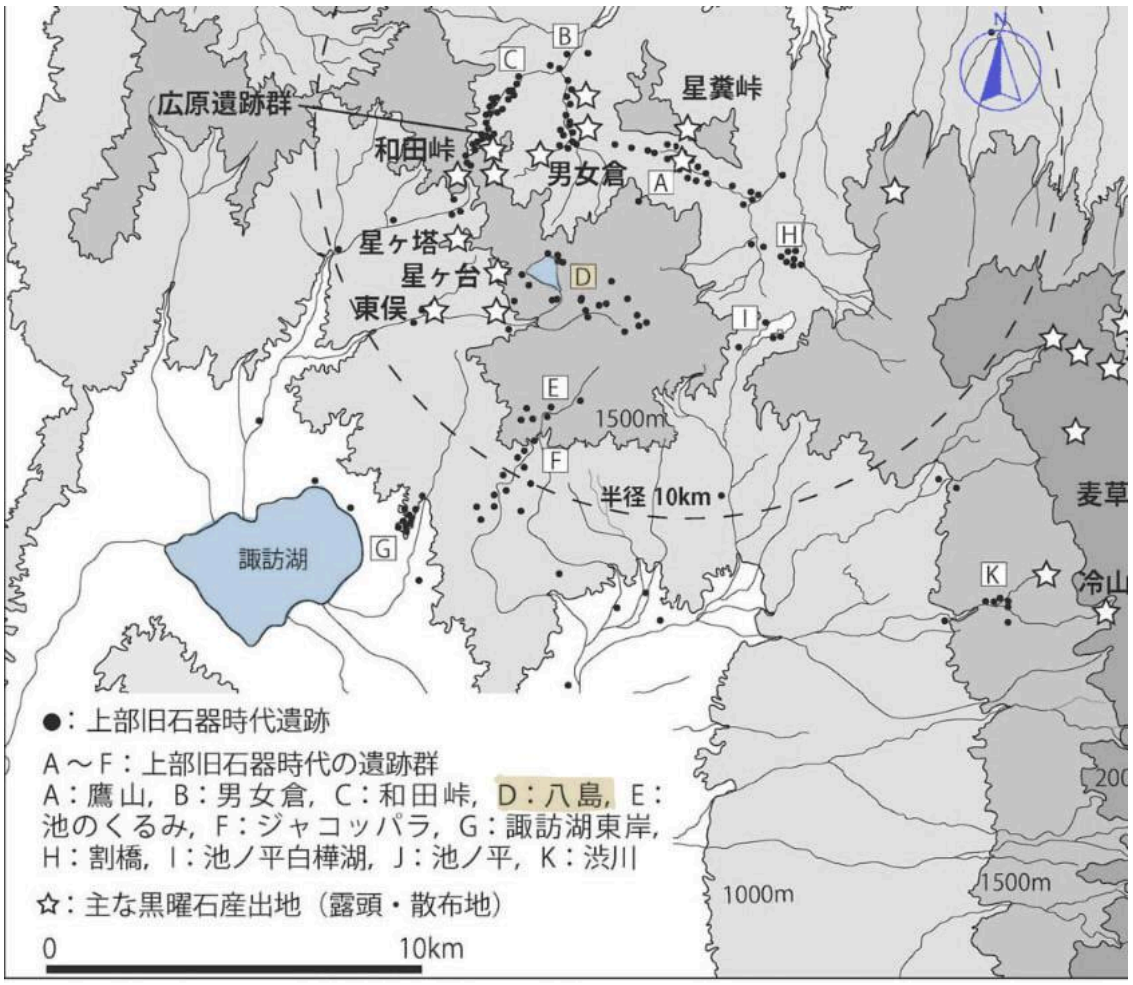
※1・№067、″彼らは黄金作りなどそれほど重視していなかったし、単なる副業という認識しかなかった。
『なんだ黄金か。たかが黄金か』
全自然が解き明かされている者にとって、黄金がつくりだせることとは、悪魔が自分に従順であるのと同じくらい、少しも喜ばしいことではなかったのだ″

《薔薇十字宣言》より

また、合成金属の開発、大気現象の調整、風力や水力を使ったエネルギー、病気の治療と健康維持など（ほかにも多数）は、フランシス・ベーコンの『ニューアトランティス（原題・薔薇十字会員の土地）』、サロモンの学院の目的についての中で述べられています。

※2・物語当時（1925年）には発見されていなかったものも含みます。ホシガトウは1920年、鳥居 龍蔵氏（人類学者、民族学者、考古学者）が発見したとされ、当初はホシノ峠という名だった。

地図も載せておきます。



黒曜石原産地と旧石器時代遺跡群
『日本考古学協会第78回総会研究発表要旨』より

本編の登場人物、最初の版の『オリカルクム～』と違ってます。
単独で来日したF・ヴァリスさんは、『コッパとレル先生』のレル先生のおじいさんにあたります。A・ラウレンスさんに女の子は生まれず、ひ孫がスミレ…おっと、これくらいにしておきやしょうかねい。

2024年12月8日　記

奥付

オリカルクムの記憶
　　8･キリガミネ 探訪

2024年12月10日 初版発行

著者　　峯村　明　E-mail
表紙素材　「素材good」
　　「ぱくたそ」

制作　　Puboo
発行所　　デザインエッグ株式会社